

みなさんお元気ですか。

2017年2月の道場での様子をお便りします。ご覧くださいませ。



2月10日から12日まで、パナマ共和国のダビット市で行われた13回パナマ合気道大和武育会の講習会に参加した。指導者は、藪内師範と山下先生で日本から来られた。山下先生は、1995年にJICA青年海外協力隊のパナマ合気道指導員として赴任された方である。山下先生は、JICA隊員後も毎年パナマを訪れ、指導を続けられた。また、藪内師範も13年間ボランティアとしてこの講習会で指導されている。今回の講習会主催者は、Gabriel Vega先生（四段）で、パナマ人だ。彼は、山下先生が初めてパナマに来られた時からの門弟である。私は、ニカラグアに来て、1年と数か月しか経ってないが、山下先生や藪内師範の二十年間のご尽力を考えると私の想像をはるかに超えたご苦労があったと察する。先生と今回集まった50名近くの生徒との間には、本当に家族のような絆がある。師範の関西なまりの冗談もまるで日本で日本人同士が笑って



いるようで、生徒との間に数秒の時差も感じない。生徒たちの「はい！」と言う素直な返事と陽気な笑いには、驚きと同時に私の気持ちをすがすがしくさせてくれた。道場長のVega先生には、外食時の移動で何回か先生の車に同乗した。山下先生に最初に会った生徒は、約300名いたと言う。しかし、その当時から続けて稽古しているのは、私一人だけだ、と言った。そして、私は彼に、山下先生の何が一番好きですか、と尋ねた。「それは、先生の忍耐力」と彼は答えた。

さて、稽古についてだが、師範が技の手本を見せている間は、生徒たちは本当にまじめに正座して聞いている。先生の技の説明が終ると「受け」がその場で正座して、まず先生に礼をして、今度は、大勢がいる生徒の方に向きを変え、そこで「お願いします」と言う。これに対して、全員が正座して「お願いします」と返す。



また、師範がつぎの技の手本を見せるとき、師範が「受け」は誰、と聞かれる。そうすると周りの生徒が立ち上がって先生のそばに来て正座する。私は、この「受け」は事前に何か話合で決まった人が「受け」を取るとばかり思っていた。しかし、実際はそうではなく、生徒から積極的に「受け」を取りにいくとのことだった。師範の受けは、容易くない。師範の投げは正直言って、厳しい。私は「受け」を取る人は大変だと少し同情する。そのなかで、こちらの生徒は、よく積極的に「受け」をかけてでるなあと驚いた。こちらの人は激しく投げられることを喜んでいる、と後になって師範に言われた。生徒が怪我をしないことを祈る。稽古が終ると白帯の生徒たちは、有段者のところに行ってその人の袴をたたむ。こちらの人は、袴に憧れがあるようだ。袴をたたむことを楽しんでやっている。実際にたたみ方も上手できれいだった。



2月12日、講習会最後の日、午後から昇級昇段審査があった。今回は、11人が受けた。5級から2段までの審査だった。どの生徒も少し緊張している様子だったが、背筋を伸ばして、気合をいれてやっている様子が印象的だった。まるで日本の力士のような体格の生徒も審査を受けたのだが、驚いたことに最後の技の納めるときは、正座して相手を抑えていた。稽古のときは、先生が手本を見せているときでも正座しないで、ズーッと立っていたのに。後で聞いた話だが、彼は合格したと聞いて涙を流していたとのこと。きっと正座することが辛かったのかなあ。それとも長い間稽古を積んできたのだろうか。私たちが行う審査と違う点は、技を変えるごとに受けも変えること。最初に技を披露して、つぎにその捌きの説明をしていたことである。全体に、技の動きは早いんだけど、少し正確さに欠けているように思えた。



今回の講習会で一番驚いたことは、稽古前に積極的にマットを雑巾で丁寧に拭いていたこと。これはなかなかできないことだと思う。日本でも道場で雑巾がけをする所は少ないと思う。ニカラグア人も見習って欲しいと思った。どのように指導したら、こうなるのだろうか。つぎに驚いたことは、左写真のように、マットを数枚積み重ねて、幅が0.5mくらいある大きなサランラップで巻いていることだった。日本ではたぶん紐で縛るだろうが、こちらは違っていた。チョッとサランラップがもったいないと思った。しかし、ほぼ全員が協力して後片付け作業をやっていた事にも感心した。ニカラグアの生徒もパナマ人のように、もっと協力しながら準備やあと片付けをしてくれるといいなあ。うちの道場では、一部の生徒は非常に協力的なのだが、数名はスマホばかり気にして、周りを見ていない。何とかしたい。

